

「10時打ち」

マクラ「突然ですが皆さんは、鉄道業界に10時打ちという言葉があることをご存知でしょうか。おそらく、ほとんどの人がご存知ないと思いますので、説明しますとですね。

列車の指定券というのは、乗車日の1ヶ月前の朝10時に発売されます。ところが、人気のある列車、例えば、何年か前に引退した寝台特急のカシオペア号。あれはプラチナチケットでしたから、10時きっかりに売り切れてしまうということが多々あったんです。じゃあ鉄道ファン、どういうところで取っていたのかといいますと、これが10時打ちというやつだったんです。

まず朝の10時までにみどりの窓口に並びます。朝の10時といっても、10時きっかりに並ぶ馬鹿者はありません。たいてい皆さん、早朝か前の晩から並んでいたようですが。10時の前にですね、あらかじめみどりの窓口の人に、自分がどの列車のどの席に座りたいのかというのを伝えておくんです。マルスという機械があります。これ皆さんご存知です。みどりの窓口の人が打ち込んで発見しているあの機械。あれをマルスというんですが、これに情報を全部打ち込んでおいてもらうんです。最後にボタンを一つ押せばいいという状況にしといてもらうんです。で、10時になった瞬間に、みどりの窓口の人が、このボタンをパッと押すんですね。そうすると、こっからは私の推測なんですけど、おそらく、JRの中枢に大きなコンピューターがあるんでしょう。この情報がパーッと上がって行くんですね。で、それと同時に、日本中のみどりの窓口から、同じような情報がパーッと集まってくるんです。で、このコンピューターに、一番早くたどり着いた人の、切符が取れるという、これが10時打ちというやつなんですね・・・皆さん大丈夫ですか？分からない人置いてきますんで。

ですからこの10時打ちというのはですね、切符を取りたいという人の気持ちももちろんそうなんですけど、みどりの窓口の人の、ボタンを押す腕というのが、かなり重要になってくるんです。たとえばこれ、10時きっかりに押したな、と思ったとしても、コンマ1秒早いと無効になっちゃうんです。とって、コンマ2秒遅いと、もう手遅れ、ということになってしまいますんで、みどりの窓口の人の腕というのが、かなり勝敗を左右してくるわけなんです。こんなのが出てまいりますと、噺の幕が開くようなんですが・・・」

「またひとり、来ましたよ」

「ああ、どんどん列が長くなるな。さすが、鹿児島と稚内を結ぶ夢の寝台特急、ほしくず号の発売日のことだけはあるよ。俺も今まで、数々の10時打ちに挑んできたけどさ、こんなに並んでるのは初めてだ」

「ところで、どこ狙いですか？」

「そりゃ決まってるだろう。列車に一部屋しかない、グランスイートだよ。一両まるまるが部屋なんだから。大きな窓に広いベッド、それから源泉掛け流しの露天風呂、映画館にテニスコートまでついてるんだから」

「列車とは思えませんね。僕は、2番手になった時点で諦めました。ひとつ下の、スーパーアダブルを狙います」

「だけどさ、もう朝の8時だぜ。こんな時間に来て間に合うと思ってる方がおかしいよ。俺なんかここにテントを張って、半年前から並んでるから」

「すごいですね。僕はいつも、上野駅でやってるんですけど、先頭に並んだとしても、取れたためしがないんですよ。それで今回は、東京駅に来てみたんですけど、すごい人出ですね」

「そりゃそうだ。みんな、あの看板につられてやってくるんだ」

「看板？・・・当駅でカシオペアのスイート、500本出ました。まるで宝くじ売場みたいですね」

「そうなんだよ。何年か前に引退したカシオペアのスイート、プラチナチケットだったろ？それがここだと面白いように取れるんだ。なにしろここには、10時打ちの達人がいるからね。知らないかな。すっぽんの谷口って」

「すっぽんの谷口？」

「狙った切符は離さない。東京駅の、みどりの窓口ひとすじ40年。黄金の人差し指なんて言われていてね。駅の売店に行っごらん。その人差し指をかたどった、純金の置物が売ってるから」

「誰が買うんですか」

「俺だよ。いつか役に立つんじゃないかと思って、お守り代わりに持ち歩いているんだ」

「一生役に立つことないでしょうけどね」

「ところで、君は誰かと乗るのかい？」

「もちろんひとりです。前は彼女も一緒だったんですけど、嫌になっちゃったみたいで。っていうか彼女、変わってるんです。せっかく寝台列車に乗ったのに、夜寝るんですよ」

「それは変わってるな」

「でしょ？たいていはもったいなくて寝られませんからね。うとうとするたびに、寝るな、寝ちゃダメだって、叩き起こしてたんです。そしたら嫌になっちゃったみたいで。まるで雪山で遭難したみたいだって」

「確かにな。だけどあんまり熱中しすぎるんじゃないぞ。俺は鉄道のせいで、親に勘当されてるから」

「勘当？」

「もう30年も前。俺が18の時。親父は会社を経営していてね。自分で言うのもなんだけど、あの頃の俺は、世間知らずのお坊ちゃまだった。ところが、近所に住む筋金入りの鉄道マニア、源べえさんとタスケさんと出会ったのが運の尽き。お稲荷さんに行くと騙されて、寝台列車に乗せられた」

「どっかで聞いたことがありますよ」

「ところが、一晩過ごしてみても、はまっちゃったんだ。帰ろうとする2人に言ったもんだ。あなた方、帰れるもんなら帰ってごらんなさい。大館で止められる」

「奥羽本線経由の寝台だったんですね」

「それからは、日本はおろか、世界中の鉄道を乗り尽くしてね。あっという間に勘当さ。おお、もう30分前。楽しみだな。お互い、健闘を祈ろう」

~~~~

「ご苦労さん」

「駅長、おはようございます。いよいよですね。とうとうあの行列、稚内まで達したそうです」

「すごいな。列車に乗る必要ないじゃないか。だけど、弱ったことがあってね。肝心の、谷口君が、いないんだよ」

「え？まずいじゃありませんか。みんな谷口さん目当てで来てるんですよ？どうしたんでしょう。40年間無遅刻無欠勤の人が。あ、娘さんに聞いてみましょう。彼女も駅員です」

「彼女もいないんだよ」

「親子で失踪？まさか、事件に巻き込まれたんじゃない」

「弱ったな。これがバレたら、暴動が起きるぞ」

「確かに。飢えた鉄道マニアほど、恐ろしいものはありませんからね。ほら見てください。ハイエナみたいな目で、こっちをにらんでいます」

「もう30分を切った」

「どうします？警察に通報します？」

「バカ。そんなことをしたら騒ぎが大きくなる。みんなで手分けをして探そう。いいか？このことは、決して口外してならんぞ。それから、君はここで私と一緒に留守番だ。あとはみんな、頼んだぞ」

「はい」

～～～

「おい、お前たち。こんなことをやって、JRの社員として恥ずかしくねえのか」

「ふっふっふっふ。谷口よ。騒いでも無駄だ。上野のみどりの窓口に閉じこめられたが最後、生きて帰れた奴はいねえのよ」

「いったい、何が目的だ」

「今日はお前さんにうちでよ、10時打ちをしてもらうのよ。たまには勝たせてもらわねえとな。東京駅にはずいぶん辛酸をなめさせられてきたからな。その腹いせに、こっそり嫌がらせをしてやったのを知らねえだろ。もともと上野止まりだった常磐線を、東京方面へ延ばしてやったのよ」

「なんだと？あれはお前たちの仕業だったのか。迷惑してるんだ。酒臭くなったからな」

「そのうち納豆臭くなるぜ。今頃、慌ててんだろうな。おめえのいない東京など、鶯谷みたいなもんよ」

「どういうことだ」

「あってもなくても一緒ってことよ。おめえがいりゃあ100人力。今日の10時打ちは、もらったぜ」

「お前たちの言いなりにはならないぞ」

「その威勢も、いつまでもつかな。おう野郎ども、連れてこい」

「へい。おら、こっちへ来い」

「きゃあ。お父さん」

「・・・みどり！」

「かわいい一人娘がどうなってもいいのか。父親の背中を追ってJRに入った自慢の娘。おめえが10時打ちをしなければ、東武鉄道に売り渡すぞ」

「東武だけは勘弁してくれ。西武ならまだしも」

「余計なことを言うな。仲間を取るか娘を取るか、ふたつにひとつよ。おっと、もう時間がねえ。野郎ども、娘を連れて行け」

「待ってくれ！分かった。俺が10時打ちをする。だから、娘を助けてくれ」

「それでこそ父親よ。さあ、マルスの前へ座れ。おめえが10時うちに失敗すりゃあ、どうなるか分かってんだろうな」

「どうしてこんなことを」

「おめえたちには分からねえだろうな。日陰者の気持ちをよ。東京駅の陰に隠れ、世をはばかりながら生きるしかねえ俺たちの悲しみを。おら、これを見ろい」

「背中一面に彫り物。パンダに登り竜！」

「上野に配属されたが最後、背中一面に彫り物を入れられ、一生このモンモンを背負いながら生きるしかねえのよ」

「そんなことが」

「あと15分。東京駅崩壊への、カウントダウンよ」

～～～

「お客様、静粛にしてください。お静かにお願いいたします」

「これが黙ってられるか。谷口さんがいないってどういうことだ。俺は半年も前から並んでるんだぞ。今日のために、どんだけの犠牲を払ったと思ってるんだ。この半年の間一度も、ぶらり途中下車の旅を見られなかったんだぞ」

「たいしたことないじゃないですか。駅長、どっかから情報がもれたようです。皆さんどこ行ったんでしょ。探しにいったまま、帰ってきません」

「谷口君は諦めよう。10時打ちは中止だ」

「お客様が待ってるんですよ」

「いいから、シャッターを閉めろ」

「お客様を閉め出すんですか？駅長、今日おかしいですよ。いつも言ってるじゃありませんか。お客様のことを第一に考えなくちゃいけないって」

「仕方がないんだよ。こっちの命が危ないんだから。お客様、離してください」

「離さないぞ」

「おやめください。うわっ」

「駅長、大丈夫ですか。あ、シャツが破れてます。こちらは大丈夫ですから、どうぞ着替えてきて・・・何ですかそれ、背中一面に彫り物。パンダに上り竜！

あなたはいったい、誰なんです」

「ふっふっふ。ばれたものは仕方がない。谷口君は戻ってこん。探しに行ったみんなもな。上野のみどりの窓口に閉じ込められているからな。邪魔をするな。邪魔をすれば君もまた、上野に送りこむことになる」

「それが、どうしたって言うんです」

「上野は地獄だ。君は知らないようだな。上野の自動改札は、自動じゃないということ」

「どういうことです」

「中に駅員が入ってるんだよ。夏も冬も、朝から晩まで、機械のように働かされる。力つきた者たちは使い捨てられ、不忍の池の藻屑と消えるのだ。季節になると水面を埋め尽くす蓮の花。あれは儂く消えていった駅員たちの、墓標なのだよ」

「ひとでなし！」

「そうなりたくなければ、言うことを聞け。そうすれば、出世の道が開ける」

「断る！」

「なんだと？」

「僕は、鉄道マンです。実は、いつかは谷口さんみたいになりたいと思って、ずっとあとをくっついてたんです。そこで教わったことを全てつぎ込んで、お客様のために、切符を取ってみせます」

「パチ、パチ、パチ。見上げた考えだ。だがどうかな。谷口君は囚われの身。君が邪魔をして10時打ちに失敗すれば、娘を東武鉄道に売り飛ばすことになる」

「・・・考えただけでもおぞましい。あなたの、言うとおりにします」

「シャッターを下ろせ。あと5分。これでとうとう上野が、日本の頂点に立つ日がやってきた。ふっふっふ、はっはっは。はっはっは」

「見てみろ。シャッターが降りていく。俺たちを閉め出す気だ。俺たちの星屑号が。俺たちの夢が」

「お客様、お待ちください」

「その声は、谷口さん！遅かったじゃないですか」

「事情はあとです。やい駅長、そこをどけ！」

「谷口！どうしてここに」

「なんだか知らねえけどよ、この人たちが、助けてくれたのよ」

「お前達は、鶯谷の駅員！」

「あんまりいじめねえ方がいいぜ。おい、言ってやんな」

「おい、山手線の中で一番乗降客が少ないからってバカにするな。乗降客は少ないけどな、駅前に建ついかわしいホテルの数はものすごいんだぞ。ホテルエレガンス、ホテルワンスモア、オールナイト、フリータイム。いいか？鶯谷の子供達はな、ホテルの看板で英語を覚えるんだ！」

「それは関係ないだろ。そこをどけ。10時打ちをする」

「動くな。動けばこのマルスを破壊する」

「おい、やめろ。マルスは駅の心臓なんだ」

「はっはっはっは。お前たちは、このマルスとともに、消え去る運命にあるの

だ」

「どうして急にエコーがかかったんだ。下手くそすぎて分からなかったぞ」

「余計なことを言うな。覚悟しろ！」

「やめろー」

というその時、何かが空気を引き裂いてビューンと飛んでくる。それが駅長の眉間にスコーンと当たったかと思うと。

「う、ううう」

「なんでしょうこれ。ああ、駅の売店で売ってる、黄金の人差し指です。お客様、ありがとうございます。谷口さん、早く、10時打ちを！」

「よし分かった！みなさん、最後の3秒、カウントダウン、行きますよ。せーの、3、2、1。えいっ。う、うう、ボタン」

「お父さん、大丈夫」

「俺のことはどうだっていいんだ。いいから早く、お客様に結果をお知らせしろ」

「はい」

「どうでした？取れました？」

「お客様、申し訳ございません。お望みのお席は、お取りできませんでした」

「・・・そうですか。ありがとうございます。感動しました。こんな私のために、命までかけていただいて。谷口さんは、いや、ここにいる皆さんは、鉄道マンの鏡です。谷口、谷口、谷口！」

「いやあ、おじさん。半年も前から並んでも取れないなんて、やっぱりほしくず号って、すごいんですね」

「よく考えてみろよ。この日本のどこかには、切符が取れた人間がいるんだぜよほどの鉄道マニアか、聖人君主みたいな人に違いないよ」

～～～

「あなた、あのポスター、なにかしら」

「寝台特急ほしくず号デビュー。鹿児島中央稚内。稚内、君のふるさとだ。どれくらい帰ってない？」

「もう、10年にもなるかしら」

「そうか。それは悪いことをしたな。稚内で君と出会って、一緒になってからは転勤続き。やっと落ち着いたのがここ、鹿児島の田舎町。そうだ、これで稚内帰って見ないか？定年になったら、色んなところ行こうって言ってたじゃないか。どうせなら、一番いい部屋がいいな」

「でも、高いんじゃない？」

「大丈夫だよ。蓄えなら少しはあるんだから。君には散々苦労かけてきたんだから、たまには贅沢してもらわないと」

「こんな小さな駅で、買えるのかしら」

「ちょっと聞いてみる。あのすいません、すいません」

「ふわあああ。どうもすいません。お客さん、全然来ないもんですから。どうしました？」

「表のポスターなんですけど。あの切符、ここで買えるんですか？」

「ええ、買えますよ。寝台特急星屑号。今日がちょうど発売日ですから。あ、発売開始まで、あと3分だ。タイミングいいですね」

「じゃあ、一番いい部屋、お願いします」

「グランスイート。太っ腹ですね。でも、今のうちに言っときますけど、まず取れないと思ってください。都会じゃ大変なんです。半年も前から並んだり。東京駅と上野駅が、血みどろの争いしたりね」

「たかが切符で？」

「そうなんです。この機械もずいぶん使ってないからなあ。取説取説。スイッチ入れて。打ち込んで、このボタンを押せばいいんだ。じゃあ、ちょっと打ち込んでみますね(打ち込む)・・・ああもう時間だ。3、2、1、はい」

「どうでした？」

「(画面を確認)・・・取れました」

「え？」

「取れました。寝台特急星屑2号、グランスイート2名様。12:30鹿児島中央発、稚内着が2日後の、朝の9:30です」

「おい、取れたってさ」

「あら、ずいぶん簡単に取れちゃったのね。駅員さん、本当に人気なんですか？」

「人気なんです。最後みんなでカウントダウンしちゃうくらい人気なんですから」

「いやあ、楽しみだわ。久しぶりにみんなに会えるんだから」

「俺もわくわくしちゃうよ。だけど世の中には色んな人がいるもんだな。こんな切符のために命を懸けるなんて」

「本当よね。そんなことするなんてやっぱり鉄道ファンで、どうかしてるわね」

完